

岐阜の伊奈波の芝居小屋 (3) ー国豊座から日吉座へー

Theaters in *Inaba* area of Gifu (3): from *Kunitoyo-za* to *Hiyoshi-za*

土 谷 桃 子

要旨

岐阜の伊奈波地域には、明治初年に開場した芝居小屋、末広座と国豊座が存在した。筆者はこれまで、『岐阜日日新聞』を資料に、両座の公演状況、末広座焼失（明治19年（1886））・国豊座倒壊（24年（1891））、そこからの再興（末広座26年（1893）、国豊座28年（1895））について論考を著してきた。本稿では、それらに続くものとして、国豊座のその後を追った。現時点の調査から、以下の経緯の可能性がきわめて高いと考えている。

国豊座は、新たに組織された「国豊演劇合資会社」が運営する劇場として再興し、当時の有力俳優初代市川左団次も舞台に上った。しかし、36年（1903）に大垣の実業家日下部庄吉に売却され「日吉座」と改称した。日下部庄吉は大垣の経済界の重鎮として、鉄道や紡績や金融に大きな影響力を持っていた人物である。彼は日吉座を後年大垣に移築し、「大垣日吉座」とした。同座は昭和期まで映画館として存続した。本稿では、国豊座から日吉座そして大垣日吉座への経緯、日下部庄吉なる人物について述べた。

1. 末広座と国豊座～再興までの概要

筆者は、明治期に岐阜の伊奈波地域に存在した芝居小屋、末広座と国豊座の動向を追いつけている。基本資料は『岐阜日日新聞』¹で、過去に「岐阜の伊奈波の芝居小屋ー末広座と国豊座ー」（『岐阜大学留学生センター紀要2014』2015）、「岐阜の伊奈波の芝居小屋（2）ー末広座と国豊座 濃尾地震後の再築・再興ー」（『岐阜大学留学生センター紀要2015』2016）を著している²。本稿では、継続調査で明らかになった国豊座のその後の動向を示したい。

¹ 『岐阜日日新聞』は、明治14年（1881）2月19日創刊の地方紙で、現在の『岐阜新聞』の前身に当たる（ジャパンナレッジ『国史大辞典』）。岐阜県図書館のマイクロフィルム資料、岐阜市立図書館のオンラインデータベースを使用した（いずれも欠号あり）。現在、明治38年（1905）年9月まで紙面確認済。

² 末広座・国豊座関連以外についての論考は以下の通り。「岐阜の地芝居の足跡ー『岐阜日日新聞』明治前半期記事の渉猟からー」（『岐阜大学留学生センター紀要2017』2018）、「明治の地芝居の側面ー『岐阜日日新聞』郡上関連記事を手掛かりにー」（『岐阜大学日本語・日本文化教育センター紀要2019』2020）、「地元ネタ芝居ー「松野殺し」と「大垣五人斬り」ー」（『岐阜大学日本語・日本文化教育センター紀要2022』2023）、歌舞伎学会令和5年度秋季大会口頭発表「明治期の岐阜地域における素人芝居」（2023.12.2）。

国豊座のその後を追う前に、前掲の拙稿 2 編を元に、末広座・国豊座の概要を記す。両座のあった伊奈波地域は、江戸期から濃尾地震（明治 24 年（1891）10 月）頃まで、岐阜地域の繁華の中心であった。東伝寺人形浄瑠璃の興行（延宝 4 年（1676）～）、辻能興行（享保 14 年（1729）～）、岐阜大桑町の孫兵衛による歌舞伎芝居興行（享保 16 年（1731）以降～）等が指摘されている。

末広座は明治 9 年（1876）1 月に尾張藩の岐阜奉行所跡に新築され柿落とし公演が行われた。15 年（1882）には 5 代目尾上菊五郎・初代市川左団次、翌年には 9 代目市川団十郎が同座で来岐興行するほどの地域随一の芝居小屋であった。しかし、19 年（1886）11 月に火事で焼失してしまう。再興の動きが折々に見られたがなかなか現実とならず、ようやく再興したのは 26 年（1893）4 月であった。小屋の大きさも興行の規模も、以前の末広座より小ぶりとなった。現在末広座跡には、歯科医院があり³、そこでの聞き取り調査で、同座が昭和 3 年（1928）に火事被害にあったと聞いた。54 年（1979）に現在の歯科医院のビルに建て替える際に撤去された末広座の鬼瓦は、岐阜県博物館に保管されている。

国豊座は、正確な開場時期は不明だが、明治 11 年（1878）4 月の番付があることから、それ以前の開場である。明治 10 年代の伊奈波地域では、末広座・国豊座が並び立ち、芝居や相撲、見世物などで賑やかであった。19 年（1886）11 月に末広座が焼失した後は国豊座が岐阜の主たる芝居小屋となり、20 年（1887）9 月には、5 代目菊五郎が興行している。しかし、24 年（1891）10 月 28 日の濃尾地震で倒壊し、再度の小屋開きにたどり着いたのは、4 年以上を経た 28 年（1895）12 月であった。これは「国豊演劇合資会社」による再興であった。

以上が旧稿からまとめた再興までの両座の概略である。次章から国豊座について詳しく述べるため、末広座のその後を補足したい。再興後の末広座は、「極小形の劇場末広座」（岐阜日日新聞（以下同紙）については年月日のみ記載）明 26.4.1）、「末狭座」（明 26.4.2）と、狭さが揶揄されている。驚かされるのは、27 年（1894）4 月から 11 月まで、大阪の女役者市川鯉京一座が、39 の替りまで演じ続けるという「岐阜開闢以来の長興行」の超ロングランを行っていることである（明 27.4.3、同 6.23、同 11.13 等）⁴。時節柄日清戦争を題材にした芝居もあった（明 27.10.11）。その他末広座で行われた興行は、順不同で芝居（女芝居、素人芝居、壮士芝居、新劇、操り芝居を含む）、手品・奇術、軽業、幻燈会、俄、講談、浮かれ節、説教源氏節、萬歳、落語、撃剣会、浄瑠璃温習会と色とりどりである。しかし、読者からの投稿を載せた「端書集」に「岐阜市の二大劇場美殿座国豊座」（明 32.7.6）とあるように⁵、末広座はすでに有力劇場⁶に数えられなくなっており、芳しくない評判も見られるようになる。例えば、末広座は不

³ 「岐阜の伊奈波の芝居小屋－末広座と国豊座－」を著した際は、歯科医院に隣接する別棟があり、天井の低さなどから芝居小屋（もしくは楽屋）の建物を内装だけ変えて使用しているのではないかと類推したが、同建物は 2016 年初めに取り壊された。取り壊し前に保管されていたもの（役者のブロマイド写真、明治・大正期の芝居関連出版物、年代不詳番付等）を数点見せてもらったが、それらの資料の現状は不明である。

⁴ 『岐阜市史 通史編 近代』（大衆書房、1981）では、同興行を「約三カ年打通し」（p.1058）とするが、今回の紙面調査によれば約 8 ヶ月である。

⁵ 美殿座は、柳ヶ瀬に明治 25 年（1892）10 月に開場した泉座を前身とする。30 年（1897）12 月に改築し美殿座に名前を改め、翌年 1 月に柿落とし公演を行っている。

⁶ 「芝居小屋」「劇場」の使い分けは、原則として両座が焼失・倒壊する前は前者、再興後は後者とする。厳密な線引きは難しいが、新聞紙面でも時代が進むにつれて「劇場」という表記が増えているため、それに倣

潔で芝居小屋の資格がない（明 34.2.16）、末広座に売淫婦がいる（明 37.10.4）、末広座は私通姦通の媒介をする場所だ（明 38.7.7）といった指摘である。38 年（1905）7 月 8 日の記事「掃き寄せ箱」には、末広座座主安藤半助⁷が、同座の「不潔及び風俗壊乱の廉」で岐阜署に呼び出されて説諭を受けたとあり、苦勞を伴う劇場運営であったと思われる。

2. 国豊演劇合資株式会社

国豊座は明治 24 年（1891）年の濃尾地震での倒壊後、28 年（1895）12 月 14 日に再開場する。そこに至るまでの推移を『岐阜日日新聞』記事でたどると、「劇場新築工事の入札」（明 28.9.20）、「国豊座の手斧始め」（同 10.10）、「国豊座の工事」（同 10.22）、「国豊座の落成近し」（同 11.14）、「国豊座の落成」（同 12.4）となる。柿落とし公演には、岐阜出身俳優 2 代目尾上卯三郎⁸を迎えた。この再興は、「当市伊奈波国豊座は 国豊演劇合資会社 といふを創立して 既に再築工事に着手したる」（明 28.10.22、下線筆者）とあるように、新たな会社を組織しての試みであった。この会社について、岐阜の土地・産業・教育・警察等全般を調査した『岐阜県治一斑』（明治 28～31 年調べ）および後継の『岐阜産業統計』（32 年調べ以降）⁹から拾ってみる。年によって記載項目が異なり、32 年以降は書式も一新されているため、情報に精粗がある。

明治 28 年（1895）国豊演劇合資会社

演劇場ヲ建設シ之ヲ賃貸若ハ演劇ヲ興行ス・払込済資本金 3,000 円

明治 29 年（1896）国豊演劇合資会社

演劇賃貸・28 年 10 月創立・払込済資本金 4,000 円

明治 30 年（1897）国豊演劇合資会社

演劇場貸及演劇興行・払込済資本金 4,000 円

明治 31 年（1898）国豊演劇合資会社

演劇場貸及演劇興行・払込済資本金 4,000 円

明治 32 年（1899）国豊演劇合資会社

う。

⁷ 末広座の座主について、筆者は旧稿で、安藤作次郎（関係者聞き取りで知り得た昭和期の末広座所有者）の父安藤半助ではないか（『岐阜の伊奈波の芝居小屋』）、明治 26 年（1893）再興時の「小屋元の古道具半助」（明 26.5.6）が安藤半助ではないか（『岐阜の伊奈波の芝居小屋（2）』）と推測したが、今回の調査で「当市末広町末広座々主安藤半助」（明 38.7.8）の記載を確認し、推測が正しかったことが裏付けられた。

⁸ 2 代目尾上卯三郎については、山崎一男「近世岐阜の名優—二代目尾上卯三郎—」（『東海夕刊』昭 34（1959）8.21～23 連載）に詳しい。『岐阜日日新聞』は、1946 年 2 月から 1959 年 12 月まで『岐阜タイムス』（朝刊）を名乗った。『東海夕刊』は、同岐阜タイムス社が発行した夕刊。山崎一男は、当時岐阜在住の演劇研究家・劇作研究家・元中部日本舞台文化協会理事で、本連載の他に、昭和 30 年（1955）10 月 20 日から 11 月 18 日まで「岐阜芸能志略」を全 30 回連載。

⁹ いずれも岐阜県統計書デジタルアーカイブ（<https://www.pref.gifu.lg.jp/page/13401.html>）より閲覧可能。

劇場貸付・岐阜市櫻町・29年12月創業・総額資本金4,000円・払込済資本金4,000円・最近損益金損4,700円・同益3,000円

明治33年(1900)記載なし

明治34年(1901)国豊演劇合資会社

演劇場貸付・岐阜市櫻町・28年10月創業・総額資本金4,000円・払込済資本金4,000円・最近損益金損105円

明治35年(1902)国豊演劇^{ママ}場合資会社

劇場貸付・岐阜市櫻町・28年10月創業・総額資本金4,000円・払込済資本金4,000円・最近損益金損337円・益265円

明治36年(1903)以降 記載なし

明治33年(1900)に掲載がないが、翌年には復活している。創立／創業年月の記載に揺れがあるが、『岐阜日日新聞』記事から、28年(1895)10月が妥当である。32年(1899)から損益額も記載されているが、毎年損が益を上回っている。

『岐阜日日新聞』記事で、同座の苦闘・健闘・努力の様子を見てみよう。柿落とし公演は、岐阜出身俳優2代目尾上卯三郎を迎え、卯三郎も故郷に錦を飾ろうと張り切り前評判は上々であったが、開場してわずか数日後の12月18日、21日に以下のような記事が見られる(下線・空欄は筆者、振り仮名は原則削除、旧字は新字に改める)。

- 国豊座の芝居 昨今興行中なる 当市伊奈波新劇場国豊座の芝居は 蓋を明けぬ前の評判程にも無く開場後無類飛切と云ふ人気立たざるは 如何のものにや(略) 会社組織の劇場で株主一同が勧進元なれば 毎日内輪揉めのする事甚しとか云へり(略)(明28.12.18)
- 国豊座芝居の千秋楽 当市伊奈波国豊座の小家開き興行は 蓋開け以来かなりの入りを占めしも 一昨日に至りて 人気はガツタリ落ちて 見物は小家の殆んど半分位ひしか無かりしかば 「廿一日限り日延なし」との貼札を市中一般は勿論 近在まで出しありしにも拘はらず 俄かに一昨十九日にて千秋楽となし 小家開き早々ウンをつき面白からぬ評判を招きたるは 亦是非もなき成行といふべし(明28.12.21)

「株主一同が勧進元」の会社組織で方針の統一が取れず苦勞している様子¹⁰や、芝居の人气が落ちて千秋楽を早めざるを得なかった事情がうかがわれる。『岐阜県治一斑』に掲載されている劇場関連会社は、28年(1895)創立の国豊座の後、30年(1897)から「岐阜演劇(場)株式会社」(上加納町／美殿町)、32年(1869)から「関本寄席会社」(今泉／今小町)の記載が加わるが¹¹、嚆矢の国豊座は先例も

¹⁰ 同社は合資会社であるため、厳密には「株主」ではないが、当時の記載に沿って合資会社の責任社員を株主に読み替える。

¹¹ 関本寄席株式会社の所在地の今泉と今小町は、同じ地区を指す。しかし、岐阜演劇(場)株式会社の所

なく苦勞したことであろう。

開場翌年 29 年（1896）の正月興行も、今ひとつうまくいかない。

- 当市の興行物 別項にも記す如く 当市の興行物は相応の大入なるが 独り国豊座は如何云ふものか 一日丈けは可なりの入なりしが 爾後余り上景気で無いとは 如何云ふ訳にや（明 29.1.5）
- 国豊座の二の替り 当市伊奈波の国豊座も 今七日二の替りを為す由なるが 同座は新年早々重五郎の一座にて大入を占めんとしけるに 小屋が不人気なるより 役者より替らんと主張する事などありて 二の替りの相談も成立ぬとか云ふ噂さありしが 昨日に至り 漸く大入を為すことになりし由（明 29.1.7）

「重五郎の一座」の市川重五郎は、市川団十郎門人を名乗る役者で、明治 27 年（1894）10 月から 11 月に京都阪井座で天竺徳兵衛などを演じている（『近代歌舞伎年表 京都篇』3（八木書店、1997）pp.61-62）。岐阜にもたびたび来ており、25 年（1892）に伊奈波および泉座（美殿町）で¹²、26 年（1893）に泉座と大垣の高砂座で興行しており、人気もなかなか高い。33 年（1900）に国豊座にも戻ってきている。にもかかわらず、この正月興行は成功とは言い難かった。

しかし、翌 2 月 1 日からの三枡他人一座、14 日からの中村伝五郎一座の興行は好評で、特に後者については「当市伊奈波国豊座の伝五郎一座芝居は 益々好評にて 毎日土間も栈敷もズツシリー杯といふ大人気」（明 29.2.19）、「(略) 昨日まで興行し 同日目出度くお楽となせり 殊に同日は此の度の興行大当りに付き 祝ひとして大切に一幕ソゝリを演じ 満場の見物に腹の皮を糾らせしとぞ」（明 29.2.21）と、大成功を収めた。この中村伝五郎は、明治 12 年（1879）1 月から大正 3 年（1914）まで伝五郎を名乗った 3 代目であろう（日本芸術文化振興会「文化デジタルライブラリー」<https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/>）。正月興行が好評だったゆえか、伝五郎は同年 9 月に再度国豊座に来ている。前者の三枡他人は詳細不明だが、27 年（1894）に泉座（美殿町）で興行している。『歌舞伎名跡便覧（第四次修訂版）』（日本芸術文化振興会、2012）によると、8 代目三枡他人が年代的に該当する（名乗り期間明治 5 年（1872）～大正 6 年（1917））。

国豊座関係者一同は、これらの興行の成功に安堵したことであろう。この時期に開業の祝宴が開かれている。

- 国豊座開業の祝宴 当市伊奈波なる国豊演劇合資会社は 国豊座の新築落成後 既に興行数回に及び

在地とされる上加納町と美殿町は離れている。岐阜演劇場株式会社は、羽島郡笠松町にあったとする記事もあり（笠松座の全焼 昨廿五日午前一時頃 羽島郡笠松町なる演劇場株式会社笠松座より発火し全部烏有に帰し（明 36.6.25））、混沌としている。創立／創業年についても、関本寄席株式会社は 31 年 1 月／3 月、岐阜演劇（場）株式会社は 31 年 1 月／6 月または 30 年 6 月と記載に揺れがある。

¹² この頃、伊奈波の末広座・国豊座とも存在していないが、「目下伊奈波に於て興行中なる市川重五郎一座の芝居仮小屋の前にいると（略）」（明 25.10.4）との記事があり、仮小屋での興行を行っていたことが分かる。泉座はのちの美殿座。注 5 参照。

今度改めて開業の祝意を表する為め 昨十二日伊奈波水琴亭に於て 宴会を催せり 本社へも予じめ案内ありき (明 29.2.13)

国豊座は更に勢いに乗り、同年 6 月には、初代市川左団次の招聘に成功する。本件については拙稿「岐阜の伊奈波の芝居小屋－末広座と国豊座－」を参照されたい。

その後国豊座で行われた興行を順不同で記すと、芝居（女芝居、素人芝居、壮士芝居、子供芝居、芸妓芝居、新演劇を含む）、萬歳、女義太夫、今様能狂言、浄瑠璃語物、常磐津温習会、独楽廻し、西洋奇術、自動幻画、政談演説、俄、西洋大曲芸、宗教演説会、活動写真、改良仏教大演説会、音楽幻燈会、東洋奇術、講談、剣舞がある。数としては圧倒的に芝居が多い。32 年（1899）頃の国豊座は、「岐阜市の二大劇場美殿座国豊座」(明 32.7.6) の名に恥じない存在であり、「(略・国豊座は) 岐阜の芝居小屋では第一に古く 且つ出方は素より 勘定場が親切と丁寧との大働きに 殊の外なる人気にてあれば 今日の大入も定て賑ふ事なるべし」(明 32.2.1) と賞賛されている。

しかし、濃尾地震後に町の賑わいは徐々に南下しつつあり、「岐阜市の二大劇場」のうち南部に位置する美殿座が勢いを増してきていた。美殿座のある美殿町に近い柳ヶ瀬には、29 年（1896）に所有者が変わり三栄座から改称した旭座があり、かつて伊奈波に末広座・国豊座が並び立っていた頃を彷彿とさせる賑わいが南部で見えはじめる。紙面を見るだけでは国豊座の苦境をはっきりと感ずることは難しいが、前掲の『岐阜産業統計』で損益がことごとくマイナスであるところを見ると、かなり厳しい実情だったのかもしれない。36 年（1903）の同統計に、国豊演劇合資会社の記載はない。同年 4 月に国豊座が売却されたからである。唐突な印象を受けるこの売却前後の様子と、同座を買い取った人物について次章から述べる。

3. 国豊座から日吉座へ

売却される明治 36 年（1903）の正月から 4 月まで、国豊座ではどのような興行が行われていたのだろうか。以下『岐阜日日新聞』の国豊座の興行関連全記事である¹³。

- 初春の楽み 中村駒次郎・市川団之助一座、本日正午より、芸題金看板丸八小僧、碁太平記白石噺、鬼一法眼三略の巻 (明 36.1.1)
- 国豊座二の替り 中村駒次郎・市川団之助一座、1.6 より二の替り、小栗判官一代記、引き続き大入 (明 36.1.7)
- 国豊座の壮士芝居 1.15 より金城太郎一座に大阪壮士明石俊太郎及び不動定雄ら合同して大一座興行、一番目梅か桜か此軍曹、二番目雪月花 (明 36.1.15)
- 国豊座の芝居 1.29 より阪東蓑助・阪東寿之助・中村梅昇・姉川姉十郎一座の芝居、芸題目見えだんま

¹³ 当時の『岐阜日日新聞』は各日 6 頁構成だが、同年は 1 月 7 日・17 日は 6 頁中 2 頁、4 月 10 日～5 月 2 日は 6 頁中 4 頁が欠損している。

り鞍馬山、太功記、遣唐使（吉備大臣）、新版歌祭文野崎村（明 36.1.27）

- 阪東蓑助一座の役割 国豊座阪東蓑助・阪東寿之助一座の主な役割（明 36.1.29）
- 旧正月の当市中 美殿座の市蔵、国豊座の蓑助一座、旧正月当込の狂言好景気（明 36.1.30）
- 松林若円一座 東京諸芸有名会幹事松林若円一座、福井巡業途中に 2.25 より 3 夜限りで国豊座で興行（明 36.2.26）
- 松林若円一座今晚の番組（明 36.2.27）
- 松林若円一座 国豊座にて興行中、座員の一部分が岐阜に残り更に 3 夜興行、3.1 の番組一覧（明 36.3.1）
- 国豊座今晚の番組 松林若円（明 36.3.3）
- 国豊座の剣舞 3.15 東京神正館長藤田正春一行の神刀波剣舞術興行、余興日清戦争団他（明 36.3.14）
- 国豊座の芝居 4.4 より大阪若手役者、大阪陣魁難波戦記、忠臣講釈植木屋の段（明 36.4.2）
- 市中の興行物 国豊座、大坂役者にて大阪陣と忠臣蔵講釈植木屋の段（明 36.4.4）
- 国豊座の浄瑠璃 4.12 より大坂明楽文楽両座合併の浄瑠璃興行、初日語り物一覧（明 36.4.11）
- 国豊座今晚の語り物（明 36.4.15）
- 国豊座今晚の語り物（明 36.4.16）

毎月何らかの興行が行われ、紙面を見る限りでは順調そうな印象を受ける。しかし、36 年（1903）4 月 16 日、上記の「国豊座今晚の語り物」が掲載されたのと同じ紙面に、国豊座売却が報じられる。

● 国豊座の売却 当市国豊座演劇株式会社は 近來滅切り人気を南部に奪はれたる為め 興行毎に大方ならぬ失敗を招き 従つて利益金の配当は皆無の有様なるにぞ 株主の多数は解散又は移転説を唱へ居たる事は ^{いつぞや}日外の本紙に記せしが 此度大垣の日下部某が 家屋敷地を合し 金四千五百円にて買取る約定整い 昨日其の譲渡しを済ましたる由 又た日下部某は 現今の劇場の一部を改造するは勿論 表方の風儀を一掃し 衰微せし人気を挽回する意気込みなりと（明 36.4.16）

株主たちが解散または移転を唱えていることを報じた「日外の本紙」は、欠損頁にあったものか¹⁴、残念ながら確認できなかった。人気が南部に移っているため興行が失敗し、利益も上がらず配当もないため、多くの株主が現状に否定的であった。結局会社での運営を断念し、「大垣の日下部某」に 4,500 円で売却することになったのである。『岐阜産業統計』で毎年損益がマイナスであること、資本金 4,000 円であることを考え合わせると、この記事に述べられた経営不振や売却額は、納得できるものである。

国豊座は、1 ヶ月半後の 6 月 1 日に新しく「日吉座」として開場した。初興行には力が入った。

● 日吉座の初興行 伊奈波国豊座改め日吉座にては 来月一日より初興行として 東京より中村時蔵、関花助及び其一門種十郎、時二郎、播磨駿、吉助、歌四郎、播磨太郎はじめお馴染みの団三郎、蓑助、仲太郎、猿糸、小伝治、三猿、猪三郎、萩之丞、伝之助等の大一座にて華々しく開演、芸題は一番目「嵯

¹⁴ 注 13 参照。

峨奥妖猫奇談」大序より大詰までと 二番目「奥州安達原」三段目と決まりたる由 久々にて大入を占むる事なるべし (明 36.5.28)

●日吉座の時蔵一座 国豊座改め日吉座にては 昨一日より初興行として中村時蔵一座にて開演したるが 観客は午前八時より続々詰掛けたれば 直ちに入場させ 午前十時となるや序幕を開け 正午に至り木戸^ノ切りの上景気を呈し 一座車輪となつて働きたれば 狂言毎に喝采を博し 初興行早々評判好かりしといふ (略) (明 36.6.2)

この興行の中村時蔵は、慶応4年(明治元年・1867)から明治41年(1908)に名乗っていた初代に当たる。関花助は、40年(1907)に5代目関三十郎を襲名している。いずれも著名な役者と言ってよい。人気も上々であったようである。その後日吉座では、今様能狂言、歌舞伎、新演劇、女浄瑠璃、女芝居、幻燈会、手踊り温習会、活動写真が行われている。

しかし、繁華の中心の南下の影響は、日吉座になったからといって避けられるものではなかった。開場10日後に早くも以下のような読者投稿がある。

●伊奈波の国豊座が日吉座と改名して遣つて見たが 矢張人気の引き立たぬは如何にも気の毒である之れは抑も土地に人気がないからであろう 天の時人の和も固より必要だが 地の利を考へねばならぬ (鼯眞連) (明 36.6.12「端書集」)

同年6月25日の記事に、7月1日からの日吉座の興行について「今回は伊奈波の春日及び松屋町の山田屋が元方」とあり、元方(出資者や興行主)を変えることで状況を変えようとした様子が見受けられる。しかし、8月の興行日数を伝える記事には「何時も不人気の日吉座が 殆ど一ヶ月ブツ通しの興行したりしは異数なり」(明 36.9.6)とあり、この時の興行(革新会一座の新演劇)は別として、全体としては苦戦が続いていたと考えられる。それがのちに大垣に移転する理由のひとつになったのかもしれない。

国豊座は、一時期会社組織で運営された。明治以降、全国的に芝居興行を会社組織で行う例が見られるようになり、先行研究もいくつか発表されている¹⁵。国豊演劇合資株式会社の盛衰について、引き続き目配りをしていきたい。

4. 日下部庄吉

興行が失敗し、株主への配当金も出せない状況にあった国豊座は、「大垣の日下部某が 家屋敷地を合

¹⁵ 笹原有貴「秋山儀四郎と道頓堀演劇株式会社—岡山県人の演劇会社—」(令和7年度歌舞伎学会秋季大会口頭発表)等。同発表では青木繁、藤岡真衣の研究に言及があった。『画像で見る飯田歌舞伎座—明治の幻の大劇場—』(飯田市歴史研究所、2025)は、2017年に発見した資料により同劇場の創立期の詳細を明らかにしたものである。劇場建築時の様相を知ることができる。

し 金四千五百円にて買取る」(明 36.4.16) こととなった。この「大垣の日下部某」のフルネームが示された資料はないが、筆者は日下部庄吉であると考えている。当時の大垣で劇場を買収できるほどの経済力があつた日下部姓の人物であること、後年大垣に「日吉座」を作っていること、国豊座の後継の日吉座はのち大垣に移ったとされること(山崎一男「岐阜芸能志略」¹⁶、『東海夕刊』1955.10.25) から、この人物と考えるのが妥当であろう。『新修大垣市史 通史編 2』(大垣市、1968) に彼の略歴がまとめられている¹⁷。

[日下部庄吉] 明治元年安八郡神戸村に生る。少壮のころすでに大志をもって大垣に移り、遂には事業界に身を投じ、年々隆盛となり、大垣における事業界の立役者となった。なかにも養老鉄道の敷設事業に奔走し、才腕をふるってその志望を達成した。大垣日吉座の建築を当時三万円を投じてなしとげた。昭和一七年一月没。(p.530)

日下部庄吉の業績を、判明した範囲で以下に記す¹⁸。電気、鉄道、鉱山、繊維、金融と活動範囲は多岐にわたり、市会議員も務めた。

- 明治 44 年 (1911)、養老鉄道株式会社設立。大垣商工会議所戸田会頭と共に、同会議所委員として会社設立に奔走¹⁹。創立総会では両者とも同社の評議員に選ばれた。同鉄道は、大正 2 年 (1913) 7 月営業開始。
- 大正 5 年 (1916) 末、岐阜県本巣郡網代村奥村鉱山(網代村字カケガ洞)のマンガン鉱床を開発。
- 大正 6 年 (1917) 10 月、揖斐川電化工業株式会社創立。日下部庄吉は監査役。大正 7 年 (1918) 12 月 18 日から 15 年 (昭和元年・1926) 6 月 24 日まで取締役。同社は、大正元年 (1912) 創立の揖斐川電力株式会社の関連企業で、日下部庄吉は 2 年 (1913) 5 月 31 日時点で同社の株を 200 株有している。
- 大正 7 年 (1918) 4 月、大垣市制施行。6 月の第 1 回選挙にて市会議員に選出される。なお、11 年

¹⁶ 注 8 参照。

¹⁷ 日下部庄吉の略歴を記した資料は他にもあるが、いずれもこの『新修大垣市史』の記載に依っている(『大垣のあゆみ 市政七十年史』(大垣市、1988)、『改訂増補 郷土大垣の輝く先人』(大垣市文教協会、2004))。

¹⁸ 参照資料は以下の通り。イビデン株式会社社史編集室『イビデン 70 年史』(1982)、大垣商工会議所『大垣商工会議所百年史』(1993、https://www.ogakicci.or.jp/wp-content/uploads/2020/11/ayumi_data01.pdf)、宮本弘道「岐阜県奥村鉱山マンガン鉱床調査報告」『地質調査所月報』第 2 巻第 6 号(産業技術総合研究所地質調査総合センター、1976、<https://www.gsj.jp/publications/pub/bull-gsj/geppou02-06.html>)、『大垣市史 中』(大垣市役所、1930)、『大垣市史 資料編 近代』(大垣市、2009)、『大垣市史 総集編』(大垣市、2014)、『大垣のあゆみ 大垣市政七十年史』、『大垣発展史』(美濃新聞社、1918)、『写真集思い出のアルバム大垣』(郷土出版社、1983)、『新修大垣市史 通史編 2』、『図説大垣市史』(大垣市、2014)。なお、『大垣商工会議所百年史』54 頁には、日下部庄吉の顔写真が掲載されている。

¹⁹ 大垣商工会議所は、大垣商工会・大垣商業会議所を経て、明治 35 年 (1902) から議員制をとり選挙で 30 名を選出。第 1 回選挙に日下部庄吉の名はないが、44 年 (1911) の活動時には議員になっている、38 年 (1905) の第 2 回選挙もしくはその後の選挙(実施年不明)で選出されたと考えられる。

(1922) 6 月以降の改選選挙後は、市議員に名が見られない。

- 大正 7 年 (1918) 刊行の『大垣発展史』(美濃新聞社²⁰、1918) に「揖斐川電力揖斐川電化工業重役日下部庄吉君談」の「工業的大垣の膨張圏」という文章あり。養老鉄道、揖斐川電化工業会社、繊維産業について語っている。
- 大正 11 年 (1922) 4 月、中央毛糸紡績株式会社 (本社大阪) 大垣工場の土工工事を請け負う (水路延長および私設道路工事)。同年 7 月大垣工場操業開始。敷地 3 万余坪。
- 昭和 3 年 (1928) 3 月 浅沼銀行 (明治 33 年 (1900) 千葉県で設立、45 年 (大正元年・1912) に大垣へ本店移転) の整理・和議に当たる。同行は昭和 2 年 (1927)、昭和恐慌のため休業、支払い停止となる。日下部庄吉は、預金者のために進んで取締役となり処理に当たった。同行は債務整理後、6 年 (1931) に廃業。

管見の範囲では、明治 36 年 (1903) の国豊座買収、後年の岐阜から大垣への日吉座の移転についての資料はなかった。この点は筆者の推理の弱点であるが、国豊座・日吉座の周辺を探る中で、彼以外に該当しそうな人物も見当たらなかった。大垣で発行されていた『美濃新聞』が確認できれば、ヒントを得られるかもしれないが²¹、現時点で判明したのはここまでである。

5. 大垣日吉座²²

山崎一男「岐阜芸能志略」6 (『東海夕刊』1955.10.25) は、国豊座について「この劇場は、晩年大垣へ売却され、それが「日吉座」であったということである。」と述べている。「大垣へ売却」をどう解釈するか迷うが、本稿で述べてきたように、国豊座が売却後すぐ大垣の地に移転したわけではなく、伊奈波の地にあるまま座名が日吉座に替り、その後大垣に場所も名称も移ったと考えるのがよさそうである。また、国豊座のその後について、『岐阜市史 通史編 近代』(大衆書房、1981) は、のちに明治座 (明治 45 年 (大正元年・1912) 3 月、伊奈波善光寺前) となるが経営困難に陥り、大正 10 年 (1921) 夏に柳ヶ瀬に移転して岐阜劇場になったと述べるが (p.1061, p.1067, p.1080)、国豊座は売却され日吉座になっているので、運営面で明治座との直接の関係はないと思われる。ただし、かつて国豊座があった「伊奈波善光寺前」に明治座が建設されたという意味であれば、国豊座の後と言えなくもない。「岐阜芸能志略」16 (『東海夕刊』1955.11.4) には、明治座について「明治四十三年^{ママ}に伊奈波善光寺前に建てられコケラ落には、市村羽左衛門 (略)」とあり、国豊座との関係には触れられていない。

本稿の目的は国豊座のその後を追うことであるので、その後身の可能性が高い大垣日吉座についても筆を進めたい。『写真集大垣いまむかし』(岐阜郷土出版社、1988) に昭和初期の大垣日吉座の写真²³が

²⁰ 美濃新聞は大垣で発行されていた新聞。明治末年から大正に発行か。現存紙面の有無不明。

²¹ 注 20 参照。

²² 大垣における日吉座と伊奈波の日吉座を区別するため、本稿では前者を「大垣日吉座」とする。

²³ 同じ写真が『大垣商工会議所百年史』、『図説大垣市史』にも掲載されている。

掲載され、以下の説明が添えられている。日吉座命名の由来が、日下部庄吉の名であることが明かされており、彼の豪華な生活ぶりも分かる。

大垣に唯一の歌舞伎座型劇場を作った人は日下部庄吉である。／姓名の一字ずつをとって「日吉座」と名付けた。丸の内（城西）に住んで、日下部御殿と呼ばれる家に住み、着流しに雪駄を履いて悠々と歩いていた。足袋のこはぜまでが金であった。本町生まれの俳優・岩田祐吉（松竹蒲田）も花柳章太郎と一緒にこの舞台に立った。／初めは栄通り（いまのブラツキ街）にあり、芝居茶屋が軒をつらねていたが、火災にあってからは見取町に移った。しかしそれも戦災で焼失した。こけら落としの日は大垣中の芸者が総出演して妍を競ったという話である。（p.46）

大垣日吉座の建築時期は、以下の『大垣市史 中』（大垣市役所、1930）に大正4年（1915）とある。

大垣には古来劇場の設無し。稀に能狂言・俄芝居等を開催する事あるも、一時的の仮小屋にて之を演ずるに過ぎざりき。其の之あるは明治十年十月中町に開かれし吉岡座を以て嚆矢とす。超えて明治三十三年船町（全昌寺南隣）に高砂座の開設あり。次て郭町に宝福座および日吉座（大正四年新築、外観日本式御殿造り）の両座創設せらる。また寄席には御殿町愛友館あり。後ち宝福座は外側町に移り、宝福館と改め、日吉座と共に活動写真館となる。（p.1049）

この記載を踏まえたと思われる『大垣市史 通史編 近現代』（大垣市、2013）は、「大垣の芝居小屋は明治一〇年（一八七七）に中町にできた吉岡座が最初である。明治三三年には、船町の全昌寺南隣に高砂座が、次いで郭町に宝福座、日吉座が開設された。」（p.288）と記す。大垣日吉座新築が大正4年（1915）だったと言い切ることを避け、明治33年（1900）以降とぼやかしている。

この2点の資料で示されている開設時期をそのまま採用することは、大垣日吉座と併記されている高砂座と宝福座について以下の齟齬があることから躊躇される。両資料では、両座を明治33年（1900）以降の開設としているが、『岐阜日日新聞』では、高砂座は21年（1888）、宝福座は22年（1889）にすでに確認できる（明21.6.27「大垣通信」、明22.5.16「浄瑠璃の招待」、同7.17「芸妓の総ざらえ」）。よって、大垣日吉座については、大正4年（1915）開場ではなく、その頃には存在していたということにしておく。

大垣日吉座のあった「郭町」は、廃城となった大垣城の旧郭内の地区で、明治17年（1884）に町名が付けられた（大垣市地名研究会『水都大垣の地名』大垣市文化連盟、2003、p.59）。大垣市は大正7年（1918）年4月に市制が敷かれるが、その前年6年（1917）3月の大垣町の地図がある（『岐阜県大垣町全図―大正六年―』大垣市文化財保護協会、2021 複製）。郭町の警察署、善光寺の近くに「日吉座」の名が認められる。『写真集大垣いまむかし』75頁に、個人の記憶に基づいて作成した「昭和初期の新善行寺付近図」があり、そこにも大垣警察署、新善行寺²⁴、日吉座がある。大垣市制施行直前から昭和に

²⁴ 新善行寺は、明治15年（1882）年に郭町に一光三尊如来を安置したことに始まる。昭和12年（1937）の

かけて、そこに同座があったことは確定してよいだろう。

大垣日吉座は、大垣の主力劇場として、芝居以外でも活用されている。各種資料²⁵から、大正5年(1916)軍事講演会、7年(1918)大垣市開市祝賀の余興、11年(1922)大垣商業学校新築落成及開校20周年記念大講演会、12年(1923)大日本国粋会西濃支部発会式、14年(1925)中部日本農民組合第2回大会、昭和5年(1930)名古屋松坂屋出張夏物大売り出し、7年(1932)大垣商業高校創立30周年記念講演会を拾うことができた。

明治初年に伊奈波地域に開場した国豊座は、24年(1891)の濃尾地震で倒壊し、28年(1895)に会社組織の運営で再興する。36年(1903)に大垣の実業家日下部庄吉に売却され日吉座となる。大正初めまでに伊奈波から大垣の地に移った。本稿ではここまでの経緯を資料に基づき考察した。その後同座は映画館になったが、火災、戦災に遭い、現在はその跡地を確認することはできない。

6.成果と今後の課題

『岐阜日日新聞』の国豊座関連記事を追うことにより、旧稿では従来不明だった再興時期を確定し、本稿では再興時の会社運営から日下部庄吉への売却、それに伴う座名の変更を考察した。日下部庄吉および大垣日吉座については、調査の余地が多分に残されているが、ある程度の事実は示せたのではないかと自負している。今後の作業や課題は、以下が考えられる。

まず、基本資料である『岐阜日日新聞』紙面調査を継続していく。先行研究で指摘のない新たな事実が発見できるのではないかと期待している。当然ながら、新聞にすべての興行が掲載されているわけではなく、誤報の可能性もある。それらに留意しつつ作業を続ける。課題としては、従来からの反省の繰り返しとなるが、芝居小屋・劇場、素人芝居に着目するあまり、役者や演目についての深掘りがいまだにできていない。上方や名古屋の役者の来岐や、女芝居興行の実態、特徴がある／好まれた演目の有無²⁶などは手付かずである。また、今回の調査で新たに興味を持ったのは、興行や劇場の会社組織による運営である²⁷。岐阜の芝居に少なからぬ影響を与えていた名古屋の状況を調べることで、手掛かりが得られるかもしれない。今後も明治期の岐阜の芝居の様相を明らかにし続けていきたい。

参考文献

浅野久枝『越境する歌舞伎―戦前・戦後の小芝居と女役者』春風社 2025

飯田市歴史研究所『画像で見る飯田歌舞伎座―明治の幻の大劇場―』飯田市歴史研究所 2025

イビデン株式会社社史編集室『イビデン 70 年史』1982

道路拡張工事のため現在の大垣市緑園に移築（「新善光寺の沿革」、新善光寺掲示板）。

²⁵ 参照資料は以下の通り。『大垣市史 資料編 近代』、『大垣市史 通史編 近現代』、『大垣商工会議所百年史』、『写真集思い出のアルバム大垣』。

²⁶ 時代は下るが、大正から昭和初期の小芝居で好まれた演目に特徴があることが、浅野久枝『越境する歌舞伎―戦前・戦後の小芝居と女役者』（春風社、2025）で述べられている。同書は女役者についても詳しい。

²⁷ 注 15 参照。

大垣市地名研究会『水都大垣の地名』大垣市文化連盟 2003

大垣商工会議所『大垣商工会議所百年史』1993

https://www.ogakicci.or.jp/wp-content/uploads/2020/11/ayumi_data01.pdf (2026 年 3 月 18 日閲覧)

笹原有貴「秋山儀四郎と道頓堀演劇株式会社－岡山県人の演劇会社－」令和 7 年度歌舞伎学会秋季大会口頭発表 2025.12.14

土谷桃子「岐阜の伊奈波の芝居小屋－末広座と国豊座－」『岐阜大学留学生センター紀要 2014』2015.7

土谷桃子「岐阜の伊奈波の芝居小屋 (2) －末広座と国豊座 濃尾地震後の再築・再興－」『岐阜大学留学生センター紀要 2015』2016.7

土谷桃子『岐阜地域芝居興行記録一覧稿 (明治初年～)』JSPS 科研費 25370213 助成調査成果 2016.3

土谷桃子「岐阜の地芝居の足跡－『岐阜日日新聞』明治前半期記事の渉獵から－」『岐阜大学留学生センター紀要 2017』2018

宮本弘道「岐阜県奥村鉦山マンガン鉦床調査報告」『地質調査所月報』第 2 巻第 6 号 産業技術総合研究所地質調査総合センター 1976 <https://www.gsj.jp/publications/pub/bull-gsj/geppou02-06.html> (2026 年 3 月 18 日閲覧)

山崎一男「近世岐阜の名優－二代目尾上卯三郎－」上・中・下『東海夕刊』1959.8.21～23

山崎一男「岐阜芸能志略」1～30『東海夕刊』1955.10.20～11.18

『大垣市史 中』大垣市役所 1930

『大垣市史 資料編 近代』大垣市 2009

『大垣市史 総集編』大垣市 2014

『大垣市史 通史編 近現代』大垣市 2013

『大垣市史 民俗編』大垣市 2008

『大垣のあゆみ 市政七十年史』大垣市 1988

『大垣発展史』美濃新聞社 1918

『改訂増補 郷土大垣の輝く先人』大垣市文教協会 2004

『歌舞伎名跡便覧 (第四次修訂版)』日本芸術文化振興会 2012

『岐阜県大垣町全図－大正六年－』大垣市文化財保護協会 2021

『岐阜市史 通史編 近代』大衆書房 1981

『岐阜日日新聞』明治 14 年 (1881) ～38 年 (1905)

『近代歌舞伎年表 京都篇』3 八木書店 1997

『写真集大垣いまむかし』岐阜郷土出版 1988

『写真集思い出のアルバム大垣』郷土出版社 1983

『新修大垣市史 通史編 2』大垣市 1968

『図説大垣市史』大垣市 2014

「岐阜県統計書デジタルアーカイブ」 <https://www.pref.gifu.lg.jp/page/13401.html> (2026年3月18日閲覧)

日本芸術文化振興会「文化デジタルライブラリー」 <https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/> (2026年3月18日閲覧)